

特114

707

長老 稻垣陽一郎著

基督教四要德

落穂集
第二輯

日本聖公會出版社

~~272
157~~



始



持114
707

基督教四要德

長老 稻垣陽一郎著

落穂集
第二輯

大正
1.12.27.
丙午

THE
CARDINAL VIRTUES

A SERIES OF SERMONS

BY THE

Rev. YOICHIRO INAGAKI

PRIEST IN CHARGE OF SENDAI SEIKOKWAI AND INSTRUCTOR
IN THE CHURCH TRAINING SCHOOL FOR
MISSION WOMEN, SENDAI

THE JAPAN CHURCH PUBLISHING SOCIETY

K O B E

1912

特刊
707

例言

一 本編收むる所の四個の説教は、千九百十一年降臨節中、仙臺聖公會の教壇にて述べしものにして、後、あけぼのに連載せしを増補訂正せるものなり。

二 『落穂集』は余の説教集にして、些少にても、公會の信仰の普及と、公會文學の爲に貢献する所あらんと欲するものにして、第一輯『魂の平安』は、遠からず日本聖公會文學委員より出版せらるべく、第三輯として『基督教處世訓』も他日、出さんとひそかに望み居れり。

三 本説教を帥するに當りカノン、ニユーボルトの『四要徳』より多少思想上の暗示を得し所あり、此に此書に負ふ所あるを明にす。

千九百十二年七月

仙臺聖公會にて

著

者

同著者によりて

稲垣
長老著

牛津近代の三名士

キーブル
ビニューマン
シール

近刊
肖像入

牛津監督ゴア博士著

稲垣長老譯

新神學と舊宗教

牛津大學教授

イリントンクウォース博士
稲垣長老譯

新三位一體教義

基督教四要徳目次

一 基督教的節制

其意義—如何にして之を養成すべきか(一)己を知ること(二)己を制すること(三)己に克つこと—今の日本と節制の徳—節制の徳と教會の聖奠
一一十五頁

二 基督教的智慮

其意義—智慮とキリストの生涯(一)不要の危険を避けられたり—(二)神の命とありては危険を畏れず—(三)智慮の基督信者の生涯に必要なる所以—主義と智慮—願望と智慮—其積極的方面—如何にして之を保ち得べき(一)良心の命に従ふ(二)經驗によりて自戒する—(三)神の命に従順なること

十六頁—廿六頁

目次

三 基督教的剛勇

其意義—剛勇の種類—信仰生涯と剛勇—剛勇の必要(一)神の懲治に堪ゆるが爲に(二)基督信者として主義あり節操ある生涯を送る爲に必要—殉教者の示せる剛勇—(三)品性修養上必要—訓練と誘惑
廿六頁—卅八頁

四 基督教的公正

其意義—人に對する公正(一)人の人格尊重(二)人の權利尊重(三)己の如く人を愛すること—神を愛する公正(一)常に神をわが心の第一位に置くこと—(二)神に對する活動的奉仕(三)神に對する相等の禮拜と恭敬を献すること—公同禮拜と信者の生活—神のものを神に歸する精神
卅九頁—五十頁

目次終

基督教四要徳

長老 稻垣陽一郎著

一 基督教的節制

われに従はんはんと欲ふものは己に克ちて日々その十字架を負ひてわれに従へ (路九〇二三)

日の下には諸の患難あり、試惑がある。常に注意を怠らず、危を避け、正き道を歩み、善と徳とを撰びて、惡に遠からねばならぬ。油断は禁物である。過去の經驗は之が爲に必要なる徳として「節制」「智慮」「公正」「剛勇」をあげ教會の學者は古より之を「四要徳」と呼び來つた。「要」とは物が其

要の徳とは何ぞや

基督教的節制

によりて動く蝶番である。要を解かば物全體が崩れてしまふ。要徳は人の行動に相當に締を付け、人をして、此世の旅路に於て出會す試誘や、困難や、危険に對して、如何に身を處すべきかを教ゆるものである。されば此四要徳の外に信仰と望と愛とを合せて七個とし、基督教道徳の完成には、此七徳を具備ねばならぬとして來た。「七」なる數は、聖書の用法に従へば、完全の意味である。故に此七徳は完全の徳を意味する。勿論是等は特に基督教的の徳なりと云ふのではない、基督教の出で來ざる以前にも、人は是等を知り、是等の功力を認めて居つた、唯基督教は是等の徳を得易からしめたのである。基督教の使命は人生に必要なるものは何であるかを教ふるに止らず、其必要のものを神の恩寵によりて、實際にかつ確實に獲得せしめる點にあるのである。實に之れ又基督教の有功力の一であつて、此四個の要徳に關しても同様である。

意義

一
此四個の要徳の第一に來るものは節制である。何となれば人間の罪の多くは、抑制を逸するから生ずるのである。節制の原則は、有名なる今の英國聖公會の説教家なるカノン、ニユボルトの語を藉りて云へば「觸れざることである」。

若し人舌の罪に陥り易きか、「節制」は戒むるに其唇に嚙を嵌むべきを教ゆる。若し人情慾に耽んとするか、「節制」は教ゆるに之を制御すべきことを以てする。若し人食慾を亂用するの癖あるか、「節制」は教ゆるに、適度に飲食を採り、必要以上に出ることなからしむる。然かも是らは皆常にわれらの陥る、若くは陥り易き弱點である。

世の萬事萬物は、取るも自由、取らぬも自由、用ふるも自由、用ひぬも自由である。取りて用ふれば身を害ひ、心を汚すに拘はらず、取りて用ふる

を誰も禁じない。誘惑の危険と、誘惑がわれらの心を引き、われらを動
す點は實に此にある。「節制」はかゝる際にわれらのとるべき途を教ゆ
るものである。火傷を爲せし子供は火を恐れる、之れ彼の手は曾て火
によりて焚かれたからである。君子は危きに近かず、安然の途は、危険物、
誘惑の物を避くることである。「節制」は實に此の安全の道である。人
の道徳的失敗、品行墮落、信用失墜、健康傷害等、詮じ來らば、多くは皆此安
全道なる「節制」を逸して、不節制の傍道に入りし爲に外ならない。「節制」
には一見人を引き付ける美貌がないかも知れない。故に人に好まれ
ない、親まれ難い、されど一旦之と交を結ば、終生の親友となる。わが
身の機嫌をとり我意を迎へわれに媚るものは眞の友ではない、かゝる
友に交れば、身を過る。人に益友が必要なりとせば、われらは人生行路
の「相談相手」として、顧問として、此「節制」を執らねばならない。

如何にし
て養成す
べきか
(一)己を
知ることを

二

されば、如何にして此「節制」の徳を養成すべき乎。
(一)己を知ることである。何事も努力なくして發達するものはない、此
節制の徳も自然に生ずるものでない。元來人間の性質は開發せしめ
ずば、退歩するものである。停止することはない。情慾は放任せばひ
どりにて消滅するものではない。惡に傾く念は齡の進むと共にひと
りにて、減退するものではない。言にも、行にも、飲食にも、思想にも、節度
よろしきを得たる美き品性は、橋にて雪の坂を下るが如く、易々と出來
上るものでない。人知れぬ苦闘に、幾度か敗れ、幾度か祈り、幾度か悔
い、幾度か泣いて、遂に獲たるものである。聖徒とは、畢竟するに能く己の
欠點と弱點とを知り、節制に於て最も成功したるものである。「わが
戦は空を打つが如きにあらず、おのれの體を打ちて之を従はしむ」哥前

九〇二六、二七と云へる使徒パウロはわれらの爲に大なる模範である。人の心状は固定せるものでない。或時は理性と意志と情愛は調和の美を呈することあれど、或時には一時の情慾に驅られ枝につながれし綱を断ち切りて、狂ひ出せる春駒の如く、脱出する状は、自からもあきれ果るほどのこともある。かゝる弱點、かゝる欠點は、本人自身にあらずば、明に知れない。故に己を知るとは「節制」の徳にすゝむ第一歩である。自分の経歴、自分の體質、自分の特に陥り易き誘惑を知らば、之に對して相當の警戒を爲す上に於ても、節制の力を神より賜るやう求むる爲にも、適切なる祈をなすことが出来る。人は春駒とは違ふ。理性と云ふ判断の明と、統制の力を備へて居る。如何なる誘惑も、此理性の判断を無視し、此意志の制御を蹂躪るにあらざれば、人を擒にすることは出来ない。神は人を強て驅り立て正き聖

き途に歩ましめんとしたまはない。神はわれらの前に生と死、祝福と咀を交々おきて、われらをして自由に撰擇せしめたまふ。此に節制の徳が修養される。此に道德的の責任と其崇美が存する。われらは節制の修練に於て、屢絶望の状態に陥ることがある。或罪或癖、或習慣、幾度か制せんとし幾度か改めんとしても、一種の習慣となりて、常に之に敗れ、之が爲に囚はれて、奴隸となり終るとき、失望の極、卑怯にも、自分は到底これに打克ち得ざるが如く、断念し、人の自分と同じ状態にあるものを見て、「あゝよわきはたゞわれひとりのみならんや」と、僅かに慰めんとする。之れ世に最も賤むべき自己同情の弊に陥たのである。此に至りては、人は其獨立自重を全く失ひ終れることゝなる。之れ實に節制と絶縁せる結果である。斯る場合に、斯るひとに要するものは勇氣である。何となれば、わが敗

れたる誘惑なりとも畢竟するに之れ人に普通なるものならざるはな
く、神はわが爲に此誘惑を逃るゝ道を備へたまふからである。神は「わ
れらのよわきと其つくられしさまを知り、われらの塵なるを知りたま
へばなり」。神はわれらに理性を與へ、われらに意志の力をあたへ給ふ
たのだから、われらは此力を大に奮起すべきである。聖書に所謂右の
手を切り、右の眼を抉り、抜くの要ありとするも、尙斷然決行すべきであ
る。或は遺傳や境遇や事情や體質等が、罪に陥るのたすけとなるが如
き場合に於ても、われをつくりしものは神なれば、神はわれをたすけて、
必ず之に打ち勝たしめ給ふと確信して立つべきである。よし此身は
弱しとするも神の恩寵は誘惑よりも強い、神の全能は罪の爲に妨げら
れない。おのれを知るとは此事を知るのである。

二己を制すること。最も明なることは先づ己を制すること能はざる

ものは身を治むること、家を治むること、人を治むるとも、出来ない
ことである。身體を害ひ、家庭を亂だし、名譽も、信用も、智能の活動力も、
悉く毀ち滅し盡くし、かつては崇高なる品性の美殿立ちし所今は荒れ
寂れて見るかげもなき様に立ち至れるも、もどをたゞせば、己を制する
ことを怠りし爲である。「節制」の徳の發達に必要な第二のものは己
を制することである。

人は或程度までは、外部よりおのれを制せざるを得ざらしめらる。相
當の衣服を身に着けねばならない、挨拶と會話には相當の敬語を用ひ
ねばならない、髪も整ねばならない、足に足袋をつけねば、人前に出られ
ない、之れ社會の禮儀と稱するものである。之れあるが故に、人は自か
ら謹み自から制し、放縱獸の如くならないのである。内心の自制は之よりも、更に必要
されど社會の禮義は、自制ではない。

である。外より餘儀なくせらるゝ自制は、自己の位置、名譽、信用を保つ爲に、止むを得ず守るもの、心の内に至りては、かゝる外來の制裁を受ない。自分は自分に對して王である。節制は外部の行動よりひしる内心に關する大なる原則である。先づ内を制せずば、外を制することは難い。過去の失敗の記憶、心に種々の光景を描き出す想像、並にわれらの日用の五官等皆節制を要する。

(三)己に克つこと

(三)己に克つことである。節制の徳に要する第三のものは、克己である。賊を捕へて繩をなへるは遅い。暴風雨の來らぬ前に、「荒天準備」は出來て居なければならぬ。誘惑來りて狼狽し、初めて意志の力を奮ひ起すやうにては、手遅れである。危険なく、「誘惑」の姿もみえざる間に、克己の修練を積むべきである。陥り易き罪に打ち克つ最上の方法は、正當なるものをも或程度まで任

意的に棄て去ることである。今の世に限ると云ふのではないが、人は規則に束縛せらるゝことを好まない傾向がある。斷食は教會が信者に勧める克己の一形式である。若し神のたすけに依りて、之を適當に實行するときは、節制の徳を養ふに於て大なる助となる。克己が如何に基督教生活に必要な分子なるかは、主キリストが常に其弟子に教へられて「われに従はんと思ふものは、己に克ち十字架を負ひて、われに従へ」と仰せられたことによりても知れる。十字架を負ふとは克己の意味である、おのれに克つ意味である。おのれに勝つとは、眼前に肉迫し來る慾望を退ざることである。悪魔の巧なる策略は、われらをして、唯目前一時の樂の爲に從來の苦心も、現在の自重も、將來の苦痛をも、自家の主義も、節操も打忘れ打棄て、盲目的に之を獲んとあせらしむることである。樂は短くして、悔は永し。之れわれらの常に

経験する所である。曾て人あり、牧師に向つて「罪について死ぬ」とは如何なることぞと尋ねしとき、標象的に説明してそれは罪の前罪におのれを陥るべきものの前にては、自分は死人の如くなることであると云つた。克己とは即ち之に外ならぬ。自分に向つて反逆を企るあらゆる勢力を理性の下に服せしめ、情慾の燃えたつときにも、之れに對して呼應することなからしむることである。節制の人とは、よし身は誘惑に取圍まるゝとも、克己によりて之れが相手とならず、靜かに平かに穩かに、在り得る人である。克己は人生の大事に臨めるときのみ必要なのではない。日常の些事に於ても、己に克つことは、將軍が戰場にあつて勝利を得るにも劣らず、光榮あることである。之れ主キリストが此の世にいませしとき、克己に就て大なる注意を拂はれし所以である。今の日本は、舊社會より新社會に移轉せる過渡に際し、古の武士的克己

制慾の風は、次第に頹たれて上下舉りて放縱の風社會に充ち、自然のままたなれ、自我の欲するまゝに行動せよと叫び、不健全なる文學も亦之をあふぎ立て、節制の徳を古物屋の棚に塵にまみれし前代の廢物の如く笑はんとするの風がある。かゝるとき節制の徳を知らしむることも難く、之を行はしむることは更に難い。然かも今の日本に此徳は必要なるものは他に尠ない。基督信者は此點に於ても日本に於ける、地の鹽とならねばならない。節制なくば放縱となる。放縱の結ぶ果は墮落である。墮落の結果は身心の廢滅の外はない。されど節制あるものは、沈着にして動せず、餘裕ありて、迫らず、其品性に威嚴あり、感化力もつよい。個人として、國民として頼しきは實に此徳を備へたるものである。

最後に如何にして以上の三事を爲し得る乎、われらは節制は四要徳の一にして、之を得るには「己を知り己を制し」おのれに克つべきことを知つた。然かも之れ言ふは易くして、行ふには難きことである。基督教

は此點に於て如何なるたすけをわれらに與ふる乎。節制の必要は知るども、われらの遺傳的若くは習慣的の性癖は容易に除き去ることは出来ない、公會の洗禮は此舊き性質をして新に生れ更らしむるものである。「汝ら新に生れざるべからず」とは舊慣舊性の抜け難く、罪の奴隸となりて其羈絆より脱する能はざる絶望せるものに對する主キリストの招きの聖言である。

かく洗禮によりて舊き人は葬られて、新き人となりて徳と聖きに進み初めても、尙誘惑四方より強く追るとき、更に神の新なる恩寵をわれらに與ふるものは信徒按手式である。之れ一旦洗禮のとき立てし約束

節制の徳
聖會の
聖奠

を堅うし、かつ聖靈の賜物——即ちわれらの心の衷に働きたまふ主キリストの靈を受くることによりて、罪を去ることを得せしむるものである。

かくて信徒按手式をうけたる者には、教會は聖餐に於て、靈に陪り、キリストの肉と血に與からしめ、其恩寵によりて節制を行ふの力を添へ、益々聖きに進み、遂には節制は苦痛にあらす、生涯の常則となり、從來慕はしく好ましくみえし罪もわが心を引き得ざるのみならず、其醜きことは益々明になり、聖きことの美くかつ愛すべきものなるを悟り得るに至るのである。

さればわれらは節制の努力に於て決して失望すべきではない。教會の提供する聖奠を用ひて、わが衷なる力を強くし此徳を身に備ふべきである。

二 基督教的智慮

蛇の如く智かれ (太十〇十六)

其意義

智慮をキリストの生涯

四の要徳の第二に來るものは、智慮である。分別ある舉動、先見の明、用心深き心掛、慎重の態度等皆其產物である。此徳は人間の行動に關する徳にして、萬事に於て善を撰び、常に善を行ふのみならず、其善を行ふ方法、手段も善ならしめんとするものである。此徳は人をして事の前、後、本末を辯へ、身の進退を過ることなく輕舉することなからしめる。

「蛇の如く智かれ」とは、昔主キリストが其弟子を傳道に遣はさるゝときに、彼らに與へられし注意である。「われ爾曹を遣はすは羊を狼の中に入るが如し、故に蛇の如く智かれ」相手は驕猛なる狼、此方は柔和なる羊なるが故に一舉手、一投足、熟慮の上にてせずば、常に使命を果し得ざるの

(一) 不要の危険を避く

みならず其身に無用の危害を受くるかも知れない。眞理の爲には人は身を獻ぐるの覺悟を要する。されど徒死は愚の極である。

われらは此徳が主キリストの生涯に於て實現せられしを見る。

(一) 先づ不要の危険を避けられしとである。いよゝゝ傳道に従事せられんとせしときに、施洗者ヨハネが投獄せられしを耳にして、ヨルダンを去りてガラリヤに避けられた(太四〇十二)。何故に然かせられしかと云へば、ガラリヤは(一)ヘロデ、アンテバスの領域内にありしと云へども、施洗者が投獄せられし宮殿より遠く隔りありしと。(二)施洗者より授洗せんとて群集の來りし場所よりも遠かりし故、ヘロデの眼を免がれて、安全に靜居するを得たからである。又後にパリサイ人やヘロデの徒がキリストを殺さんと謀れるとき、一時危険を避けて海邊に赴き給ふた(太十二〇十四、可三〇六)。施洗者が斬首せられしと知るや、主は

基督教的智慮

弟子を伴ふて人なき野に退きたまふた(太十四〇十三、可六〇卅一)。何故に主はかく用心深く危険を避けたまひしなる乎。卑怯なりし爲乎、又神の保護を信せざりし爲乎。否、之は自分の責任と義務の念より来たのである。「わが時未だ至らず」と主は屢宣ふた。其時迄は、主の身體は大切である。輕舉不要の危害の身に及ぶが如きことありては、其尊く重き使命を全うすることが出来ない(約七〇六)從て此時は死ぬることよりも、避けて生くることの方が、必要であつたからである。故にヘロデを恐れて然かせしにあらざることは、明である。

(二)さればとて、又神の保護と攝理を信せざりし爲でもなかつた。其父より托せられたる使命を果すに於ては、一人や二人のヘロデありども妨を爲し得ざることは、明である。されど神に任すと、神を試むるとは同一のことではない、別の事である。一羽の雀すら故なくして、空より

(二)神の命を危険を畏れず

落し給はざる神は其の聖子を守護し居たまふに相違ない、さりどて、近寄る必要な、或は充分に避け得べき危険を敢て冒すべきでない。急行の列車が向より勢つよく馳せ来るを知りながら、神が守りたまふに相違なき故危険なしとして、鐵道線路を横過るとせば如何に、之れ神を試るのである。野の試誘の時も此の種の試があつた。神はわれらに身の前後を考察するの力を賜ふて居る。キリストの此世に於ける生涯は人間としての條件の下に送る生涯に於て、其使命を果すことでありしが故に、機尙熟せざるに其死を無用に早むるが如きことを避けんが爲に人間相當の用心をなされたのである。されど一旦人の急を救ふために、神の命なりと信せしときは、危険を冒しても尙ほ進みたまふた。ユダヤに引退中にラザロの死をさくや、弟子らが危険を恐れて止むるをも聽かず、再び都近く入りたまふた。之

二〇
が眞の智慮である。進退其宜きを得たのである。人其義務なりと信ずることを憚らず断行するときは之れ主の所謂「晝歩む」ものにして、決して躓くことはない。

さればキリストが其最後のエルサレム入京に當り、公然驢馬の子に乗り、群衆の歡呼せる間に入城し、殿堂を廓清め、パリサイの輩らを面責し、自からメシヤなりと公宣して、さなきだにキリストを殺さんと謀れる者の激昂を煽ぎ立て、遂に死に就かざるを得ざるに至りしは、此智慮を欠きし處置なりし乎、否。之ぞ其眞に時機至りしにて、傳道の初期より既に己に充分に覺悟せし死時なりし故に、怯めず憶せず其義務を果したまふたのである。昔キリストの弟子が主より遣はされし如く、われら信者も此世の未信者の間に置かれてゐる。加之誘惑は餓ゑたる狼の如く、四方よりわれらを餌にせんとして待ち構へて居る。昔の弟子

には蛇の如く智きこと必要なりしとせば、今のわれらにも同様に必要なることは明である。

二

智慮は基
信者の必
要なる所
以

されば何故に智慮の徳は信者に必要なる乎。之れ信者は皆主義の人なるが爲である。言ひ換へれば、無節操、無定見の生涯を爲すものにあらずして、其爲すこと、其考へ企ることに於て、キリストの生涯と品性と教訓に於て、示されたる標準と模範に倣ふべき者である故である。智慮は我等の弱點と我等の長所とを知り、自から爲し得ることと己の力の及ばざることを辯へしめる。されば之れはわれらをして無分別のこゝとをせず、其生涯を正しく過らずに送らしむる道徳上の案内者にして、主義ある生涯を送らしむるものである。主義の人とは、爲すべきことを知れるのみならず、何故になすかを知れるものである。主義の人

主義の智
慮

願望と智慮

は從つて智慮の人である。されば苟も事、信者としての主義に反することはありとせば、わが身にどりて如何に楽しく見え、慕はしく思はるゝものありとも、之と探り之に觸れざらしむるものは、此智慮である。智慮はわれらを誘惑に陥ることより救ふ。

從つて智慮は情慾と願望に對するわれらの態度を定め、探りてよきは探り、避くべきは避けしむる。われらの願望のすべては、若し之れを満足せしむるの手段と力を有するときは、必ず満足せしめざるべからざる乎。人生の目的は快樂を追求するにある乎。將又義務を遂行するにある乎。信者の主義立場は是等の點に於て明である。主義なき者の生涯は、航路を辨へざる航海の如くである。恐べき潮流の存するを知らずして、之に巻き込まれる。紀州の熊野附近に黒潮と稱するものがある、漁船が暴風雨に逢ふて之に巻き込まれるや、如何にしても、此の潮流の外

其積極的方面

に出ることが出来ない。遂に流れ流れて死に果るか、運よくば、小笠原か、八丈島に流れつく。されど、さることは稀である故に、此黒潮内に入らざるやう心掛けることは、船頭に必要である。われらの周圍にも此「黒潮」はあらざる乎。

されど智慮とは單に危害を避くるにのみ必要なるものにあらず。又進んで此世の生活に於て眞に美きもの、眞に貴きものを見出さしめる。智慮ある商人とは、常に損害を避くるのみならず、好機を逸することなき人である。キリストは無用の害を避けられしも、善を爲すに當りて勇敢に進まれたるはわれらの倣ふべき點である。

三

われらは如何にして此智慮を保ち得るや。(一)良心の命する所に従ふは其一である。良心は若し傷けられ、鈍くせられてない限り、常にわれ

如何に保し
之を
得べし
（一）良心
の命に従ふ

らをして、爲すべきこと、爲すべからざることを教ふる。主義ある信者の生活とは、何事の生ずるとも、一々皆之れを良心に訴へて、其の判断裁決に従ふ生活である。良心はわれらが悪に近くときは苦痛をわれらの心に與へて、之に陥ることなからしめる。良心は常にわれらに教へ示して、之は基督信者として爲すべきことである、之は爲すべからざることである、之は避けねばならない、之には觸れてはならない、此に入りはならない、此より退かねばならない、之は苦くとも、好まずとも爲なければならぬ、此には立ちて進まねばならないと注意し、警戒し、激勵する。

(二) 經驗によりて自戒する

(二) 經驗によりて自戒する。自分の經驗並に人の經驗は、われらに智かるべきことを教ゆる。前車の覆るを見て、後車は用心する。樂を追ひ、罪に走るは、如何に引心的なりとするも、其途にゆきしものは、安全に歸する。

還せしものなきのみか、皆身と心に重傷を負ひ、名譽も、信用も損じ、果ては悲惨の最後をとるに至りし例は、歴史にも、文學にも、人の經驗談や、懺悔談によりても、或はわれらの現に見聞する事實によりても知る所である。世に「格言」若しくは「諺」と稱するものがある。之れ人間の積み重ねし經驗の結晶せし智慮の聲である。是等もわれらを助けて用心深く、かつ分別あらしめる。

(三) 神の命に従順

(三) 神の旨に従順なることも其一である。事々物々、神の旨のある所を奉體して之を遂行せんとつとめる。惑はしきことの生ずるとき、誘ひの迫るとき、神はわが身に今如何に爲すを望み求めたまふやと考ふるときは大抵のことは明になる。

四

智慮はすべての人に要する徳なるが如く、基督信者にも必要である。

此世に誘の絶えざる限り而てわれらは狼の群に入られたる羊の如く
ある限りわれらは蛇の如く智くして用心深く、取捨進退大に謹まねば
ならぬ。常にわが心の燈に油を貯へ、かの五人の愚なる童女の如く不
用意の爲に肝心の時に油盡きて燈を點じ得ざりしが如きことなきや
う心掛くべきである。

三 基督教的剛勇

汝ら世にありては患難を受けん、然れど懼るゝ勿れ、
我すでに世に勝てり (約十六〇三三)

其の意義

剛勇は大なる危険に對して、勇敢なる行動としてあらはるゝにもせよ。
將た又艱難に對して一言の不平もなき、堅忍にあらはるゝにもせよ、等
く人の尊ぶ所である。之れに反して、危険を恐るゝの卑怯と、不耐の

剛勇の種

不平とは等しく人の蔑む所である。されど世の人の多くは、此剛勇とは、
或少数の人、特に軍人若くは船員等が、其職掌上非常の場合に示す所の
ものにして、通常のものには關する所少きやう考へて居るが、決して左
様ではない。之れ萬人に常に必要であり、又之を養成するの機會は通
常の生活にも澤山ある。剛勇は人をして、困難を恐れず、反對に僻易せ
ず、耐忍することを厭はしめず。何人も戰なくしては、勝利なく、勝利な
くば冠も獲ることなかるべきを教へ、「終まで忍ぶものは福なり」との主
の聖言を想ひ起さしむ。
われらは曾て佐久間船長が、水雷艇沈没の際の勇敢なる行動をほめた。
われらは先頃伊勢の海にて、暴風雨の爲めに沈没せる驅逐艇の生殘者
を救ひ、死者の遺體を搜索する爲に示されたる潜水夫潜水女の勇敢な
る行動を賞した。

基督教的剛勇

若し是等の非常行爲が示す剛勇は、賞すべしとせば、貧しき生活に堪へ、
あらゆる克己忍耐をなして、老いし兩親を養ふことも、同じく賞すべき
行爲である。

信仰生涯
と剛勇

皇國の勝敗此一舉にありと叫んで、露西亞艦隊を破りし海軍大將の勇
敢は世界の賞讃を博せりとせば、人知れぬ名もなき神の小さき僕が不信
者の間にありて、四方より迫り来る誘惑に對して、身も魂も汚さず、信
者の體面を重んじ、神が常に俱に在して、たすけたまふとの念に強うせ
られて、ひとり人知れず戦ふも、道徳上の勇者である。彼の名は、かの貧
者のそれと同じく、將軍の名の如く世の人の口に賞め崇めらるゝこと
もないであらう、されど「天の冊」には其名記されるに相違ない。かゝる
人こそミルトンの所謂

天にて名高く、地にて知るもの稀

なるものである。

若し基督信者の生涯は、温室に育つ花の如き生涯にあらずして、風に打
たれ霜にも雪にも逢ふて尙其翠の色を易へざる松柏の如き生涯たる
べしとせば、而て神がわれらを訓練したまふも、子に甘き母親が慈愛に
溺れて、遂に其子を過らすが如きにあらずして、鍛工が名刀を鍛ふるが
如く五度も七度も爐に入れ、鉄砧の上にて打つが如く

神はいつくしむ 子をむちうち
火をもて鍛ふる ことを知らば

此の世にありて、信仰の旅を爲さんとするものにどりては、誘惑あり、試
鍊あり、樂き理想は、冷き困難に蹂躪せられ、身にも心にも重傷を蒙るこ
とあるべきを覺悟せねばならない。生命に入るの門は狭い。「わが子
よ汝主に仕へんとせば、誘惑に會ふことを心に備せよ」。主は「われに従

剛勇の必
要(一)神の
懲治に堪
にゆるが爲

はんとするものは、日々其十字架を負ひて、われに従へ」と仰せたまふ。
之には勇氣を要する。進んで戦ふ勇氣と退て忍び守る勇氣を要する。
(二)神の懲治に堪ゆる爲に剛勇を要する。神は屢其の僕を鍊へたまふ
やうに思はる。大監督クイラントンは「汝の試鍊艱苦は皆神の愛の證
徴と思ふべし」と其「聖生涯の榮」に於て教へて居る。聖書にも其例は少
なくはない。主は愛すれば愛するはと、其愛するものを鞭ちたまふ。
アブラハムは、神と借に歩みし人であつた。神の聖旨を行ふにつとめ
し人であつた。一旦神の召あるや、其の郷と、其親族とに分かれて神の
召のまゝに立ち出でた。神は彼に一人の息子を思掛なくも與へ、之を
一切の祝福の中心となしたまふた。然るに突然神の聖聲あり「爾の子、
爾の愛する獨子、即ちイサクを携へてモリヤの地に到り、わが爾に示さ
んとする彼所の山に於て、彼を燔祭として、さゝぐべし」(創二二〇二)と

の命を受けし彼には勇氣は要せざりしか。神を信じて委するの勇氣
を要せざりし乎。

施洗者ヨハンは婦の生みし者のうち最も大なるものなりと主の仰せ
給ひしほどの偉人物である。然も正義を踏んで死をおそれず。悪を
責めて一歩も假籍する所なかりし其大なる生涯も、最後にはヘロデの
牢に繋がれ女の奸計によりて、首斬られんとせるとき、彼には剛勇は必
要ならざりし乎。神を信じて委するの勇氣は必要ならざりし乎。わ
れらは皆アブラハムではない。われらは又施洗者とも違ふ。されど
各其召されて置かれたる處に於て神に仕へんと心掛くるものである
が、われらにも小きモリヤの山の試鍊は與へられ、又ヘロデの牢獄の如
き運命にも會する。何故に神は我等が身にかゝる不幸、かゝる困難、か
ゝる悲哀を與たへ給ふのである乎。神はわが身に對して憤り給ひつ

ある乎。神は我を棄て給ひしかど、心に疑ひ惑ふが如きとき、われらは神を信じ、神に信頼する爲には少なからざる勇氣を要するのである。つゞやくことは誰にも出来る、小言をいふことも容易い、失望し失信することども、むつかしくはない。唯難きは信すべからざる如く見ゆるときにも、尙信じ、忍ぶべからずと見ゆるときにも尙忍ぶことである。之には勇氣が必要である。之を爲し得るものは信仰上の勇者である。勇氣は必ずしも大事件の生ぜるときにのみ必要なるものではない。神がわれらに授けたまへる日々、わがつとめを遂行する爲に必要である。

（二）信者として、主義あり、節操ある生涯を送る爲に

（二）基督信者として、主義あり、定見あり、節操ある生涯を送るにも、亦勇氣は必要である。われらは常に『讚美頌』に於て『白きを衣たる殉教者の隊、みな主をほめま

殉教者の剛勇を示せる剛

つる』と歌ふ。われら過去の歴史を回顧するときには如何に屢信者は世人より誤解せられ、迫害せられ、憎悪されたかを知る。管に古の羅馬や其他に於ける大迫害のみならず、外國傳道開けて幾多の宣教師は支那に於てアフリカに於て印度其他に於て殺された。わが國の舊幕時代に於ても同様であつた。近くは明治初代に於ても其通であつた。信教の自由を興へられたる今日に於ては古の如く火刑に處せられ、磔殺せられ、斬首せらるゝが如きことはない。されど今にても或場合或場所にては、信者となることは多少の誤解や僻見の的となり、不便や不利益を忍ばねばならないことがある。其道徳上の標準は他のものよりは遙に高く、遙に清く、正義と純潔の生活を爲すが故に、信者は人に憎まれ、人に厭はれ、人に疎外せられるのである。世は世に屬するものを愛す。信者は世に屬しない。故に世に惡まれる。主も其の弟子に向ひ

基督教的剛勇

「汝らは世の屬ならざるが故に、世は汝を憎む」と仰せられた。若し世に軟化して風のままに帆をあげて都合よく世を渡らんとするならば其迄なれど、苟もイエス、キリストの僕として、我等が洗禮の時に神と會衆の前で約束せしが如く、十字架を耻とせず其旗下にありて勇ましく、世と肉と悪魔とに戦ひ、信者としての主義、信者としての立場、信者としての節操を堅く守り、憚からず之を行はんとするには、如何なる身分のものにても、如何なる位置のものにても、之が爲めに生ずる種々の困難と支障に出會すに相違ない。主キリストは豫め此事を其弟子に告げたまふた。「汝ら世にありては患難をうけん。されど恐れ、勿れ、われ既に世に勝り」之れ一方に於てわれらは患難に會するを免れざることを示すと共に、他方に於てわれらの大將既に克ちたれば、われらもやがて勝つべきを告げられたのである。

(三) 品性に必要

「汝もかの人の弟子の一人に有らずや」とわが身にとりて最も不都合便の場合に云はるゝとき、然りと答ふるにはよほどの勇氣を要する。それよりもかゝるときには、われらは昔の弟子の如く「われ此の人を知らず」と否むは容易である。されど然かありてはわれらは一種の裏切者となる。裏切者は卑怯なる者はない。さればわれらは受動的の勇氣のみならず攻勢的なる此種の勇氣をも要するのである。

(三) 今一つわれらに勇氣を要する方面がある。それはわれらの品性修養の點に於てである。われらの前にはキリストの模範的品性が示されてある。此のキリストの模範は其特異の身分よりして萬世萬民に通じて有功である。何人も男にても女にても、大人にても小供にても、老ひたるものにも、若きものにも、其の手本をこゝに見出し得る。されど若し此模範的品性の如くなること容易のことならば何にも別

試練と修練

に苦心も努力も必要はないであらう。然るにわれらは受洗せりとして直ぐ皆聖徒となり、女聖となるにあらねば、古き根性、古き惡癖、古き罪は執念深くも出で來たりて我等がキリストの品性に似んとすることを妨ぐる。われらは屢古今の高徳の聖職や信者の品性に就て聽くとき美しく思ふ。自分もその如く在り度思ふ。無私の愛、全く自己を棄て、神と人との爲に生ける生涯、常に穩かに、常に温く、常に從順に、子供も直ぐなづくけれど、又一步も犯す可らざる威嚴を備へ、主義と立場は一步も譲らざる堅實の人を賞する。されどかくの如き眞の基督教的紳士、かくの如き基督教的淑女の高品聖徳は、ヨナの瓢の如く、一夜に生長するものではない。曲れる心は正しくせねばならない。背ける意志は神の意志に從順となるやうしななければならない。聖書に言ふ如く「キリストに似る」キリストの形裏に成る爲には幾度か敗れても屈せず撓ま

ず、小野道風の見しと云ふ蛙の如くならねばならない。之が爲に失望することがあるかも知れない。されど決して絶望することはない。「絶望」は信者の品性修養には禁物である。われらは此點に於ても大なる勇氣を要する。

「終迄忍ぶものは救はるべし」。幾度失敗しても、屈せず、撓まず、神のあはれみと力とをたのみ、いのりて、信じて進まば、神はいつか、われらの願をきゝ、容れたまふて、わが欠點、わが短所を矯め、わが罪をいやし、正し、潔めたまふに相違ない。唯要するものは勇氣である。神のあはれみを信するの勇氣である。

されば四要徳の第三のものなる剛勇は、神の懲治を忍ぶ點に於ても、信者として生活するが爲に生ずる種々の困難と戦ふ點に於ても、又自己の欠點を矯正する點に於ても必要である。

四 基督教的公正

凡て人に爲られんと思ふことは汝ら亦人にも其如くせよ、律法と預言者は即ち是なり(太七〇十二)

其意義

人間の徳のうちにて、自分之を備へ居らずとも、何人も尊ぶ徳がある。即ち公正である。公正は公明正大にして、廉潔と正直を意味し、公平にして人の権利を重んじ、わが手の達する所に、わが欲しきものありとも、之れを控へて出さず、世にはわが身の外に他人も存在することを認め、其の利害をも考へ他人も自分と同様の権あれば、之を相當に認めることである。

文明國にありては國の法律、社會の制裁等によりて此事は或程度まで行はれて居る。公然他人の権利、生命、財産を侵害することを許さぬ。さ

れと基督教的公正は是以上である。信者は單に法律に觸れざること、を以て満足するところが出来ない。此徳を以て、わが心を支配する動力とし之を以て他人に對する態度とすると共に、尙進んで神に對するわれらの態度としなければならぬ。

一

人に對する公正

先づ人に對する公正を考へやう。

(一) 人格は尊重

人とわれとの間に公正を保たんとせば

(二) 人の人格を重せねばならない。自分のみ人でない、他人も人である。自分のみ神の形に像られて造られたのではない、他人も同様である。自分の人格のみが不滅であるのではない、他人のも同様である。されば若し自分の人格が尊く、自分のもてる神の像が尊く、自分の不滅性が尊しとせば、他人のも同様に尊きに相違ない。従て他人を傷け他人を

害することには出来ない。他人を欺くことも出来ない。主キリストは其山上の説教に於て「われ汝らに告げん、凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん。又兄弟を愚者といふものは、集議に干らん。又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし」と教へられた。之は古の『殺す勿れ』と云ふ誠より更に一步を進めたるものにして、實に人の人格を尊重するより出で来れるものである。高等なる道徳の要素は人の人格を尊重することである。

（二）人の
権利尊重

（二）人の権利を重せねばならない。自分に屬するものは自分之を支配す。他人の侵害を許さない。自分は自分の権利を保護する。若し自分の権利が尊しとせば、他人の権利も尊きに相違ない。他人の権利を重んずると云ふとは、口には言ひ易いけれど、實行は容易でない。貪欲なる子供が自分より年少にして弱きもの、手にせるもの

を自分が欲しきときは、彼れの泣くも嘆げくも顧みず之れを奪ひ取るを見るは快よき光景ではない。利己的の人、自己中心の人は、實にかくの如き子供を大きくしたるに過ぎない。他人の迷惑も、他人の困難も、不便も、失望も、悲嘆も、頓着することなく。唯おのれを利せんとのみ圖る、之れ果して正當なるべき乎。之れ果して公正の徳に適するものであらふか。

かく公正は人の人格と権利を尊ぶ徳なりとせば、基督教道徳の根本要素にして、又文明國の法律の規準たる「なんぢ殺す勿れ」「汝姦淫する勿れ」「なんぢ盜む勿れ」「汝隣人につきて虚偽の証左を立る勿れ」「偽る勿れ」「なんぢ隣人の家を貪る勿れ、隣人の妻、奴隸、婢女、牛、驢馬、また凡て隣人のものを貪る勿れ」どの誠は此公正の原則より出で来れるものなることは明である。世の犯罪の多分は此の徳を破壊し、無視し、蹂躪せる結果であ

る。

三「おのれの如く、人を愛せねばならない。「おのれの欲せざる所は人に施す勿れ」にては足りない。「おのれ人に爲られんと欲ふことは、人にも其の如く爲ねばならない。之れ基督教的愛の精神にして、又實行である。従て基督教的公正は、當然父母に事へては孝、天皇に仕へては忠、長上に對しては敬、幼少に對しては親切、朋友に對しては信實となる。かく基督教的公正は人の人格を重んじ、人の権利を尊び、人を愛するに至らしむる。是等は勿論基督敎倫理の初歩的の原則である。信者は皆心得て居る。されど心得て居ること、心得て居る如く實行するとは同一の事でない。われらは知つて居ても、中々行はない。さればわれら此點に於て公會問答の「隣に對して爲すべき事は如何」どの條項を常に緝くことは必要である。」(新舊書二〇八頁及二〇九頁参照)

神に對する公正の心位第一の要

二

更に神に對する公正は如何と云ふに。
二「常に神をわが心の第一位に置くことである。基督信者は、皆神は其被造物に對して奉仕と服従を要求するの權ありと信ずる。われらを造り、又われらを贖ひたまひし神は當然われらの上に權を有したまふ。従てわれらは神に仕ふるの義務を有するは明である。神に仕ふるとは必ずしも直接に主と其公會の爲に盡くすことのみを意味しない。勿論敬虔なる両親が其子女の内、適當なるものを神に獻げて、主の用に立たしめんことは極めて望ましきとなれど、おのれの分と位置に應じて、種々の方法に於て神の爲に盡くすことができる。我等は各今置かれある位置に於て最善を盡くして神に仕ふべきである。諸子は唯諸子のみ爲し得るつとめを、神より授けられて居る。之を果す爲に、神は諸子を

此世に生存せしめたまふて居る。天職とは即ち之である。「神の僕は臺所に於ても神の榮を現はすべく、神を忘るゝものは、宮殿をも汚す」と今の英國の有名なる一説教家は云ふて居る。

われは今在る位置に於て、神の命を守りつゝありや。神がわれに望み求めたまふ所に忠實なりや。われらの生き居るが故に、一人にても益を受けつゝあるものありや。われらの生けるによりて、神の聖國は此世に臨ることが少にても早くなりつゝありや。今のカンタベリーの大監督は牛津のゴア監督の事を評して「其人の生涯が終るとき、種々の階級や種類の人々が其人が此世に生存せしことを、神に感謝する人物である」と言た。われらも小さい乍らも、かく在ねばならぬ。またかくあるべきはずではないか。

(二)神は雷にわれらの心を要求したまふのみならず、われらの活動をも

求めたまふ。怠惰は神のものを神に歸すことを無視することである。若し神がわれらに爲すべきことを與へたまふものとすれば、神はわれらに、全力を盡して之れを成就するやう要求する權を有したまふ。「わが父は今に至るまで働きたまふ、われも働くなり」「天地の創造者」も人間の「救主」も今尙活動したまふとすれば、われらは、怠惰であり得る理由はない、少しもない。古の諺に「悪魔は人を試むる。怠惰者は悪魔を試むる」とある。之は意味ふかき言のみならず、眞實の言である。神の榮の爲に活動して居れば、悪魔の乗する隙がない。惰けて居ればこそよからぬことも考へ出づるのである。「小人閑居して不善を爲す」との東洋の諺も畧之と同様の眞理を含んで居る。「われらは神のことを爲し居らずば、神に敵することを爲して居る」と或説教者は云ふた。(箴二四〇卅

公正はわれらに主の戒を告ぐ「汝何ぞ終日此に空しく立つや」汝葡萄園に往きて働け。」主と公會のために幾分にてても、盡さんと心掛くるものにどりては、盡す方法と手段と機會は、何處にてても、何時にてても、種々ある。熱心は方法を見出し、愛は手段を教ふる。

(三)神に對しては、當分の禮を捧ぐ恭敬なること

三神は更に又神に相當する禮拜と恭敬をわれらより要求したまふ。公正は我等に唯神にのみ之れをさへぐることを命ずるのである。われらは果て神がわれらの祈禱と讚美と禮拜とを要求したまふことを眞實に衷心より會得し居るや否。神に祈り、神を崇め、神を拜むことは、われらの氣分の問題ではない。之れ實に神に相當することを神に歸することである。これ造られしものが、造りし者に對して、當然爲すべきことである。われら神を信じて神に従ふ以上は神に相當するだけの尊榮を歸せねばならない。教會にありて禮拜を司り祈禱をさへぐ

公同禮拜生活信者の

るものは、司式聖職である。されど教會の禮拜は公同禮拜なれば、信者も各其分を相當に盡さなければならぬ。信者の缺席は教會の禮拜力を減ずる。

禮拜と祝

基督教國の家庭にありては、兩親は其子供に告げて「けんは主日である、教會に出席しなければならぬ」と曰ふ。天氣が如何にありとも、子供の機嫌が如何にありとも、教會に行くとは、義務なりと教ゆる。故に成長の後も教會の禮拜に列することは、定れる週日の主要行事として居る。自分の氣分や、自分の都合によりて、神に相當する禮拜をさへぐることが易るべきではない、然らずば、遂には教會に出席することを種々の口實の下に怠るに至る。「教會に行きても益することはない。下手な説教をきくよりも、家にありて讀書するか、郊外に子供を連れて散歩でもする方優つて居る。徒らに時間徒費である」などと云ふに至る、

基督教の公正

かくては全く神に對してわれらが當然さゝぐべき分を忘れ終ること
 なる。禮拜に關する此の誤謬は禮拜の根本原則即ちわれらが教會
 に來るは、主として「得んが爲め」にあらざりして、實は「獻ぐる爲め」なるこ
 とを忘れるより來る。禮拜の要髓は「禮拜」である。其の内には懺悔も
 祈禱も讚美も、含んで居る。説教は唯其の一部に過ぎない。かく云ふ
 ども説教者は説教に全力を盡くさずともよいと言ふ意味ではない。
 説教と禮拜の他の要素との釣合を失はないやう心掛ねばならぬとの
 意味である。然かするときは「いざわれら主に向ひて歌ひ、救拯の磐に
 向て喜ばしき聲をあげん、われら感謝を以て、その聖前にゆき、主に向ひ
 歌をもて喜ばしき聲をあげん」と心より唱へ得るに相違ない。之れ禮
 拜に來る精神である、動機である、目的である。神の事は先に來る、われ
 ら自身の事は後にすべきである。禮拜を怠るは、之れ神に歸すべきも

神のし
 する神に
 精神の
 神

のを私することゝなる。神のものを盗むことゝなる。「われらを造り、
 われらを護り、此世のものを與へ、殊に主イエス、キリストにより世を贖
 ひて量なき愛を現はし、恩恵を受くる法を示し、來世の榮光の希望を懷
 かしめ「智慧と能力を備へ、健康衣食住、親族朋友其他諸種の善きものを
 與へたまへる」神はわれらより相當の時間と精神を禮拜の爲に獻ぐる
 ことを要求するの權を有したまふ。「汝安息日を聖として忘るゝ勿れ」
 神は一週の中一日は神に屬するものとして要求したまふ。神は少な
 くとも一日の中、朝夕、われらの時間の一部分を祈と感謝の爲にさゝぐ
 ることを要求したまふ。之れ當然神に屬するものなるが故である。
 勿論われらの献物は之をわれらが神より受くる賜物に比るときは實
 に、數ふるに足らざるものである。されど神は其量をみずして、われら
 の精神われらの心掛を嘉みしたまふ。

われらは人の物を盗むことはしない。况んや神のものを盗まんとするをや。われらは人のものを盗まないかもしれない。されど神のものを屢盗んで居る。神にさゝぐべき禮拜を怠るときは、神のものを盗むことゝなるではなからふか。(馬三〇八)

四

以上述べ來し所によりて、基督教的公正とは何を意味するやは略明になれりと信ず。凡そ義務は其結果は如何にありとも、正當なるが故に爲さざるべからずとの決心は、之公正の徳より出るものである。要徳の前の三者は自分に關するものなれども、最後の公正は他に對する徳である。若し神と人とに對して此徳が相當に行はるゝならば、教會衰微の憂なく世に各種の犯罪も其跡を斷つに至るに相違ない。

基督教四要徳 終

大正元年十二月十五日印刷
大正元年十二月廿五日發行

著者

仙臺市元鍛冶町八番地
稻垣陽一郎

發行者

神戸市下山手通五丁目十五番
ヒユ、ゼ、フラス

印刷者

神戸市吾妻通り三丁目十七番屋敷
菅間徳次郎

發行所

神戸市中山手通三丁目外五番
日本聖公會出版社

印刷所

神戸市吾妻通り三丁目十七番屋敷
福音印刷會社神戸支店



アダムス原著
中道政市譯

○小説大王の使者

寓意譚中の白眉として推賞せられたる King's messenger と題する原書を面白く邦文俗語體に譯したるものなり、趣味と教訓を併せ得んと欲する人は速に一本を座右に備へられよ

定價 四十五錢

哲學博士 元田作之進氏著

○信者に與ふる書

本書の内容は、信者の信仰とは如何、信者の心理状態は如何、如何に未信者に對すべきか、如何に信者に對すべきか、如何に教會に對すべきか、如何に神に對すべきか、如何に基督に從ふべきか、如何に己を修むべきか、如何に日常信徒の心得べき實際的教訓を平易に説き明せり、實に信者必讀の良書なり、日常信徒の

定價 貳拾鐵錢

○聖クリストファーの幻

本書は基督教徒が千有餘年の昔より傳へ來りたる面白き物語にして、前半は少年少女の喜ぶべき御伽噺なり、後半は前半の物語より演譯して、前回は少適の讀むに値する修養的讀物なり、而も體裁瀟洒、クリスマス贈物として最も好

石版摺表紙體裁極優美
定價 貳拾錢

272
157

○病 床 の 友

監督 フォス 氏 編

本書は久しく病苦に呻吟するもの、又は病床に侍して看護の任に當るもの、其
他世の不遇逆境に沈淪するものに力と慰藉とを與ふる聖句を蒐集せるものにし
て教役者信徒の病者訪問等に必携すべき好適書なり

コロタイプ 刷
挿畫數葉入表裝優美
定價二十 銀錢
郵税二

神戸市中山手通三丁目外五番

發 賣 元 日本聖公會出版社

振替貯金口座大阪九一〇九

東京市銀座通四丁目一番地

代理販賣店 教 文 館

振替貯金口座東京一一三五七

終

